Report 共同研究

「四脚」?「背の白い黒牛」??

オリジナル版『絵引』における「間違い」とマルチ言語版の編纂

君　康道（非文字資料研究センター　研究協力者）

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」において、『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂刊行がプロジェクトの一つとして進められ、2007年度末でのプログラム終了までの5年間で全5巻中第1巻及び第2巻がその成果として世に問われた。5年間で2巻とは確かに「成果」と呼ぶには少し淋しいかもしれないが、プロジェクトに携わった者の1人としては、やはりこれが限界だったというのが率直な感想である。

私が関わったのは、マルチ言語版『絵引』の中でも主として英訳部分の編纂作業である。その作業は、歴史や民俗を専攻する英語に堪能な大学院生、あるいは英語を母語とする大学院留学生が翻訳を担当し、そこで訳された原稿を我々プロジェクトメンバーが校閲するという、あたかも「家内制手工業」のような方法で進められた。この方法は当然のごとく決して効率がいいとは言えず、我々プロジェクトメンバーも英語のネイティヴは一人のみ、ましてや元の『絵引』についても全員がその内容に精通しているわけでもなく、校閲はまさしく一字一句対比検討しながらの作業であった。そのため5年間で2巻が「限界」だった訳だが、このような手段を選んだことには大きな理由があった。それは本ニューズレター20号でジョン・ボチャラリ氏が述べているように、①COE事業推進目的の一つである「若手研究者の育成」のためであり、そしてもうひとつは②『絵巻物による日本常民生活絵引』は日本常民文化研究所が創設者・澁澤敬三から受け継ぐ貴重な「財産」であるため、なるべく愛情を持った関係者の手で作業を行いたい、というこの二点である[1]。その中でも特に②の「貴重な財産」ということには大きな注意が払われたところであり、元の『絵引』の価値を損なわないようにするため、一連の作業には更に以下のような原則を設けて進められた。

Ⅰ　出来るだけ原文に即して忠実に翻訳する。
Ⅱ　絵引の絵を基本としながら、そこに描かれたものに妥当な訳語を与える。
Ⅲ　極力日本語をそのまま残さないよう、原文を適当な訳語に置き換える。

我々の目的は決して『絵引』の改訂版を編纂することではなく、あくまでその「マルチ言語版」を編纂することであり、上記の原則は当たり前といえば当たり前のことである。しかしこの原則に沿うがゆえに生じた問題は数知れず、その幾つかについては既に本ニューズレター15号の拙稿[2]やCOEプログラム国際シンポジウム[3]にて報告したところであるが、実は更にある大きな問題点が我々を悩ませていた。それは『絵引』それ自体における記述の「間違い」についてである。これは元の『絵引』編纂・校閲時に絵巻の絵及び内容を再確認しなかったがために生じた問題だと思われる。実際にどのような「間違い」があったか、第2巻の『一遍聖絵』の中からいくつか例を挙げてみたいと思う。

・例1　解説文の記述の間違い

「178 塀」[4]の項では解説文に次のような記述がある。

「第四巻、因幡堂執行の覚順が夢のつげによって夜半因幡堂の縁にねている一遍にあいにいくところ。」

図1に見えるように、これは178項の絵に対する解説の一文であるが、この部分を実際の絵巻[5]と照合させてみると、実はこの場面は覚順が一遍に会いに行くところではなく、すでに一遍との面会を果して自坊へと戻っていく場面であることがわかる。これは単純な思い違いに拠るものと思われるが、このような初歩的な間違いも起きるということは、『絵引』が持つ膨大な情報量故に元の『絵引』の編纂・校閲もかなり困難を極めた、ということの証なのかもしれない。

図１　中央の杖を付く僧が覚順。元の絵巻ではこの場面の右側に堂内で一遍と面会する覚順が描かれている。

・例２　絵の読み取りの間違い

図２[6]は「188 女の服装・頭巾」の項に掲載されている絵である。この中でキャプション番号が付されたもののうち、20は「四脚」、同じく21は「四脚のあし」としてキャプションが付けられている。四脚はテーブルの類のことと思われるが、この部分もまた実際の絵巻を見てみると、これらは四脚ではないことがわかる。この絵は絵巻第12巻、光明福寺での一遍臨終の様子を描いた場面から切り取られたものであり、この四脚とされるものは実は光明福寺観音堂の簀子縁の角の部分である。つまり本来なら20は「簀子縁」、21は「束」とキャプションが付けられるべきところであろう。普通に考えればテーブルの上に人が乗っていること自体不自然であり、絵引の編者はなぜこれを「四脚」としたのか疑問が残るところである。しかし一遍聖絵には一遍たちの念仏踊を桟敷に上がって見物する人々や、一遍一行に群がる群衆を屋根上から眺める人々などが描かれており、ここで切り取られた場面もこうした雑踏の一場面と考えれば「四脚」の上に乗る行為も考えられなくはない。そのような誤解から編者はこのモノを「四脚」としてしまったのだろうか。

図２　20「四脚」？　21「四脚のあし」??

・例３　絵の読み取り、解説文双方の間違い

「229 牧場の牛」[7]の項では、図３の絵についての以下のような解説文で始まっている。

「第一巻、善光寺門前の牧場の牛。三頭の牛があそんでおり、一頭は背の白い黒牛、他の二頭は白牛。」

この部分も同じく絵巻の絵で確認してみると、キャプション２の「背の白い黒牛」の背は、実は「白」ではなく「茶色」に着色されており、本当は「背の茶色い黒牛」である。元の『絵引』でも引用されている、鎌倉末期に描かれた牛の図説である『国牛十図』にもやはり背の茶色い黒牛が描かれており、このような毛色の牛は割と一般的であったようである。ここでの読み取りの間違いは元の『絵引』の絵が白黒で描かれたことに起因するものであり、この模写絵を見ただけでは確かに背の色は白であるように見え、茶色と認識するのはかなり難しい。澁澤敬三が画家に模写絵を白黒で描かせた理由は色々あるのだろうが、ここではそのことが裏目に出てしまったようである。

229 牧場の牛

第一巻　善光寺門前の牧場の牛。三頭の牛があるようである。一頭は背の白い黒牛、他の二頭は白牛。白牛は今日ほとんど見かけなくなっているが、古い時代にかなり多かったとは思えない。インドでは今日も白牛は聖なる動物として尊ばれているけれども、日本でも古くはそうした思想があった。上がってこの牧場は善光寺に所属するものであり、この寺の牛を放牧している。なぜかと思われる。牛はその性状から、しばしば角突きをする。角の生えている牛元かゆいために、そこを何かですりあわせずにはいられないものだ。牧牛の盛んな地方では言いつたえられているが、一頭の牛がうしの角突きすることを長崎県五島地方では牛角力と言っている。そうした性質を利用して牛に角突きをさせてたのしむ風が今日も方々に見られる。奄美大島、島根県隠岐、愛媛県宇和島地方、新潟県佐渡島中がそれである。最近では八丈島でも復活している。ただしこのように角突きする牛は角が前方に出ているものでなければならず、そういう牛の多い地帯にこれが見られるわけで、角の後方に出ている地帯には角突きを見てたのしむ風習はない。この図は偶然的な描写であるがそうした点から興味ふかいものがある。

なお牛の牧についてふれておくと、牧には官牧と私牧があり、頼朝三代勅下・西成の各郡にわたっており、これらの牧の牧子が用を下下する諸国の駒の始をしたとあり、もともと用のほとんどに牧の多かったことがわかる。しかし中世・関東では山麓原野が多く利用せられ、また島も利用せられている。そして「ただけの牧」馬だけの牧、牛馬併用の牧とニつにわけることができ、牛牧には、「諸蕃式」に見えたものでは、武蔵神崎・上総長野・三浦岱知島・長門角島・筑前長島・伊予忽那島・相模高野がある。これは官牧であり、私牧はそれに敏

図３　右側に「背の白い黒牛」。確かにこの絵では背は白く見えるが…。

以上主なものを三例挙げたが、数的にみてこうした記述の間違いはそれほど多いわけではない。しかしそうした間違いを修正するか否かについて、我々は大いに頭を悩ませた。先にも述べたとおり我々の目的は「貴重な財産」たる『絵引』のマルチ言語版を編纂することであり、我々自身の解釈による新たな『絵引』を編纂することではない。しかし修正が加わることによって内容も変わり、その結果元の『絵引』とは内容の異なる別物のマルチ言語版『絵引』が出来上がってしまったとしたら、それは我々の目的と大いに反することになる。

更に加えて、マルチ言語版はその名の通り英語の他、キャプションは中国語及び韓国語にも訳されることになっており、その作業もほぼ同時進行で進められていたため、英訳部分で記述内容はともかくキャプションを修正することは他の言語の翻訳作業にも影響を及ぼすことになる。そうした箇所が増えていけば作業に混乱を来たす事は容易に想像しうることであり、その結果マルチ言語版が一巻も世に出ることなく COE プログラムが終了してしまうことも現実に考えられうることであった。

こうした最悪の事態を回避する必要からも、マルチ言語版編纂においては結局のところ「間違い」には目を瞑り、「原則」に従って原文に沿った訳が施されることになった。そのため上梓されたマルチ言語版『絵引』を見てみると、例 1 の解説文は「Kakujun（中略）is on the way to meet Ippen」、例 2 のキャプション訳はそれぞれ「table」、「table leg」、更に例 3 は解説文、キャプション共に「black cow with white back」と、いずれも「間違った」訳が付けられている。しかし「間違い」と言ってもそれは敢えて意図的な「間違い」であるため、それを読者、利用者に対して周知する必要から、マルチ言語版『絵引』の序文においてはその旨の断り書きが付け加えられている。

COE プログラム終了後にマルチ言語版『絵引』編纂プロジェクトは非文字資料研究センターに継承され、私自身もまた引き続きお手伝いをさせて頂いている。現在のプロジェクトは残りの三巻の編纂刊行を目指すほか、COE の時には途中で断念せざるを得なかったキャプションのフランス語訳や『絵引』のデータベース化などが再開される運びとなり、更に野心的にプロジェクトが進められている。また COE 終了後に国内外の関係機関へ頒布された 2 巻のマルチ言語版『絵引』の成果品も、徐々に研究者や学生などの目に触れる機会が出来てきているようである。こうした現在のプロジェクトの進捗や COE での成果品が世に問われ始めたことを考えるにつれ、個人的にはやはり『絵引』の間違いについてもいずれは修正されるべきという思いが強くなっている。そのためにはもう一度原点に戻って、元の『絵引』そのものの研究が必要なのではないだろうか。これはマルチ言語版『絵引』の編纂以上に大変な作業になることが予想されるが、やはり「貴重な財産」を継承していくためにも、いずれはどこかが負わなければならない仕事であるように思うのは、私一人だけではないであろう。

1　ポチャラリ、ジョン「『絵引』から *Pictopedia* へ――次の三年間」『非文字資料研究』20　pp.10-11　2008.9
2　拙稿「『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版編纂における問題」『非文字資料研究』15　pp.16-17　2007.3
3　神奈川大学 21 世紀 COE プログラム第 3 回国際シンポジウム「場の記憶・からだの記憶　非文字資料研究の新地平」セッション Ⅰ「マルチ言語版『日本常民生活絵引』の編纂刊行」における報告「マルチ言語版『生活絵引』の編纂とその意義」（2008 年 2 月 23 日 於 神奈川大学）
4　新版『絵巻物による日本常民生活絵引』第 2 巻　p.59　平凡社　1984
5　元の絵巻の参照や照合には、基本的に小松茂美編『日本の絵巻 20「一遍上人絵伝」』（中央公論社 1988）を用いた。
6　新版『絵巻物による日本常民生活絵引』第 2 巻　p.69
7　同上　p.121